

# 『程氏家塾読書分年日程』訳注（三）

松野 敏之

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるものであり、本誌第一三号からの連載である。読書会の参加者は、以下の通りであり、本稿は担当者（氏名の上に「※」を表記）の草稿を元に作成している。

清水則夫（早稲田大学大学院博士後期課程）・※宮下和大（早稲田大学大学院博士後期課程）・北澤絃一（早稲田大学大学院博士後期課程）・阿部光麿（早稲田大学助手）・※大場一央（早稲田大学大学院博士後期課程）  
・※小池直（早稲田大学大学院修士課程）・上村新治（早稲田大学大学院修士課程）・田村有見恵（早稲田大学大学院修士課程）・※中嶋諒（早稲田大学大学院修士課程）・原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学大学院修士課程）  
・阿部亘（早稲田大学大学院修士課程）  
・佐々木仁美（早稲田大学大学院修士課程）  
・李茜（中山大学外国語学院碩士／現在早稲田大学大学院留学中）  
・※松野敏之（早稲田大学大学院博士後期課程）

【凡例】

- ・ 底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、清刊本（叢書集成本・四庫全書本）との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。
- ・ 解釈には、『程氏家塾読書分季日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社出版、一九九二年四月）を参照した。
- ・ 訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。
- ・ 原文・訳文中の「」を附した部分は、底本では割注に相当する。
- ・ 訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾読書分年日程』卷一（底本卷一・一丁表〜卷一・十三丁裏）】

程氏家塾読書分年日程卷一。

鄭<sup>①</sup>程端禮述。

「日程。節目、主朱子教人讀書法六條修<sup>②</sup>。其分年、主朱子寬著期限緊著課程之說修<sup>③</sup>。」  
八歳未入學之前

讀性理字訓〔程達原増廣者〕。

日讀字訓綱三五段。此乃朱子以孫芝老能言、作性理絕句百首教之之意。以此代世俗蒙求千字文最佳。又以朱子童子須知貼壁、於飯後「行飯時」、使之記說一段。

〔校異〕

a 程氏家塾…四庫全書本、此の四字無し。 b 卷一…叢書集成本、「卷之一」に作る。 c 鄭程端禮述…叢書集成本、「元程端禮畏齋述」に作る。 d 程達原…底本、「程達原」に作る。四庫全書本、「程達源」に作る。『宋元学案』、叢書集成本等に従つて改める。

〔注釈〕

(1) 鄭…地名。南宋では慶元府治所、元代では江浙行省慶元路治所であり、今の浙江省寧波市。程端礼の出身地。鄭県の属する慶元府は、両宋を通じて多くの進士及第者を輩出している。

(2) 朱子教人読書法六条…輔広(字は漢卿)が編輯した『朱子読書法』のことで、「居敬持志、循序漸進、熟読精思、虚心涵泳、切己体察、著緊用力」の六条をいう。輔広は『朱子全書』中より、朱熹が門人に説いた読書の方法や読書の要を集め、それを朱子読書法として六条に概括した。程端礼は『分年日程』序文においても、『朱子読書法』に基づいて本書を著していることを述べ、その綱領にも「朱子読書法」を収める。本誌第一三三号一一八頁、および一四三三頁参照。

(3) 朱子寛著期限緊著課程…「寛著期限、緊著課程」は、朱子読書法の一つ。『分年日程』綱領・朱子読書法には、輔広がまとめた六条(前註参照)以外にも、「歛身正坐、緩視微吟、虚心涵泳、切己体察」

と四条でまとめられるものと「寛著期限、緊著課程」の二条でまとめられるものがある。本誌第一号一四三頁参照。

(4) 性理字訓：程端蒙撰、程若庸補輯『性理字訓』一卷のこと。程端蒙（一一四三—一一九二）、字は正思、江西鄱陽の人。程端蒙が『性理字訓』（原名は『小学字訓』）三十条を作り、それに程若庸が増補して一八三条とした。朱熹は程端蒙に宛てた書簡の中でその著を賞賛し、「小学字訓甚佳、言語雖不多、却是一部大爾雅也」（『朱文公文集』巻五〇・答程正思（一一八））と言っている。また程端蒙は董銖と共に「程董二先生学則」を作成。伝は、『宋元学案』巻六九。

(5) 程達原：程若庸、達原は字、安徽休寧の人。咸淳四年（一二六八）の進士。武夷書院の山長を務める。饒魯に師事して朱子の学を学び、門下には呉澄・程鉅夫などを輩出。勿齋先生と称される。著に『性理字訓講義』、『太極洪範図説』がある。伝は、『宋元学案』巻八三。

(6) 孫芝老能言：未詳。一案として「朱熹の孫の芝老が話せるようになった」との意で解釈。朱熹「亡嗣子壙記」（『朱文公文集』巻九四）には、長子朱塾の次男を「恩老」と呼ぶことが見えるものの、「芝老」については未検。<sup>明</sup>戴銑『朱子実紀』巻一・世系源流には、朱氏一族二十世までがまとめられ（朱熹は九世）、五世以後は単名であったことが分かる。その唯一の例外が、十一世（朱熹の孫の世代）の「恩老」となる。

なお、姜漢椿は「孫芝老」なる人物が『能言』という書を著したと解釈するが、本訳注では採らない。『性理絶句』序において、病中に『四書』を黙読して賦したと朱熹が述べていることと合しない

からである。

(7) 性理絶句百首：朱熹『性理絶句』一百首。朱熹がその序で述べるところによれば、病中に四書を黙読し、思うところを絶句として賦したものだ。もと『訓蒙絶句』と言ひ、九八首であったものが、後に『性理絶句』一百首として世に流布した。

(8) 蒙求千字文：『蒙求』と『千字文』、共に童子教育のための書として世に通行する。『蒙求』は、李瀚が童子教育のために、六朝時代までの古人の有名な言行を集めたもの。覚えやすいように四字一句で記し、全五九六句から成る。

『千字文』は、周興嗣(四七〇?—五二二)の作として伝えられる四字一句、二五〇句(計一千字)からなる四言古詩。多くの故事・成語を引用し、天地自然の理法から人の生き方まで様々に説く。その一千字は一字の重複も無く、書の手本として広く用いられた。

(9) 童子須知：朱熹『童蒙須知』一卷。朱熹が童子の教育のために、衣服や挙措動作、読書などについてまとめた書。

〔通釈〕

『程氏家塾読書分年日程』卷一

鄭<sup>ま</sup> 程端礼 述

〔日程。細目は、朱子「教人読書法」六条に基づいて定め、そのカリキュラムの配分は、朱子の「期限はゆるやかに、課程は緊密にせよ」の説に基づいて定めた。〕

八歳、入学以前

『性理字訓』〔程達原が增補修訂したもの〕を読ませる。

毎日、『性理字訓』を二段から五段ほど読ませる。これこそ朱子が孫まきの芝老がものを言えるようになってきたことによつて、「性理絶句」百首を作つて教えた意である。この『性理字訓』を世俗で用いられている『蒙求』『千字文』に代えるのが最も良いだろう。

また朱子『童子須知』を壁に貼り、食事の後で（すなわち食後の腹はらごなしに）この一段を暗誦させる。

自八歳入学之後

讀小學書正文<sup>(1)</sup>

日止讀一書、自幼至長皆然。此朱子苦口教人之語。<sup>(2)</sup>隨日力性資、自一二百字、漸增至六七百字。日永年長、可近千字乃已。每大段内、必分作細段、每細段、必看讀百遍、倍讀百遍。<sup>(3)</sup>又通倍讀二三十遍。後凡讀經書倣此。自此說小學書、即嚴幼儀。大抵小兒終日讀誦、不惟困其精神、且致其習爲悠緩以待日莫、法當纒辦遍數、即暫歇少時、復令入學。如此可免二者之患。

〔校異〕

a 乃…四庫全書本、「而」に作る。

b 辦…四庫全書本、「完」に作る。

〔注釈〕

(1) 小学書：朱熹『小学』六卷。一一八七年、劉清之（一一三三—一一八九）が収集した小学に関する言行を朱熹が増補改訂して成書した。

(2) 朱子苦口教人之語：程端礼は傍証として頭注に「朱子曰、読書須是一件一件読、理会了一件、方可換一件。若不与逐件理会、則雖読到老、依旧生。又曰、須是精專精研、使一書通透爛熟、都無記不起處、方可別換一書、乃為有益。若輪流通念而覈之不精、則亦未免枉費工夫也。須是通透後又却如此温習、乃為佳耳。又曰、読書不精深、只是不專一。」と付す。

(3) 倍読：暗誦、背誦。倍は、「背」に通じる。なお、『分年日程』において「倍読」と対で用いられる「看読」は書を見ながら音読すること。本訳注においては、「倍読」を「暗誦」、「看読」を「素読」とそれぞれ訳した。

〔通釈〕

八歳、入学以後

『小学』本文を読む。

一日に読むのは、ただ一冊の書にとどめる。それは幼少より成人まで同じである。これは朱子が言葉を厳しくして人に説いた教えである。

（読書は）その日にこなせる力量と本人の資質に応じて、一、二百字から徐々に増やしていつて六、七百字に及ばせる。日々年々、伸ばしていき、千字に近づけさせていく。

大段落ごとに、小段落を分類して作り、その小段落ごとに、素読を百回、暗誦を百回おこなう。また小段落を通して暗誦を二、三十回ほど行う。これ以降の經書を読む際も、この方法に倣う。これより『小学』を説かせていくことが、そのまま童子自身の威儀を厳かにしていくことになる。たとえ童子に一日中読誦させたとしても、その精神を徒らに疲労させてしまう上に、学習への努めも緩慢となつて、結果的に一日を無駄に過ごすだけとなつてしまう。だから一日の読誦回数をはつきりさせ、時折暫くの休憩を入れて、それからまた學問に打ち込ませるべきである。そうすれば、この二つの憂いから免れることができるであらう。

日程「小學<sup>(1)</sup>。讀經三日、習字演文一日、所分節目、詳見印空眼簿<sup>(2)</sup>。大學<sup>b</sup>。必待做次卷工程<sup>(3)</sup>、方許學文。」

一、每夙興、即先自倍讀已讀冊首書、至昨日所讀書一遍。内一日看讀、内一日倍讀。生處誤處、記號起止于夜間補正遍數。其間日看讀、本爲童幼文理未通、誤不自知者設、年十四五以上者、只倍讀。師標起止于日程空眼簿。凡冊首書爛熟、無一句生誤、方是工夫已到、方可他日退在夜間與平日已讀書輪流倍溫、乃得力。如未精熟、遽然退混諸書中、則溫倍漸疎、不得力矣。宜謹之。凡倍讀熟書、逐字逐句、要讀之緩而又緩、思而又思、使理與心浹。朱子所謂精思、所謂虚心涵泳<sup>(5)</sup>、孔子所謂溫故知新<sup>(6)</sup>、以異於記問之學者、在乎此也。

〔校異〕



a 小學…叢書集成本・四庫全書本、「小學」の下、「大學○小學」の五字有り。(※四庫全書本は「○」が空格。)  
b 大學…叢書集成本・四庫全書本、此の二字無し。

〔注釈〕

(1) 小學…ここでは、課程としての小學の意。『分年日程』で「小學」とある場合は、課程としての小學をいい、「小學書」とある場合は書物としての朱熹『小學』を指す。なお、「大學」は課程・書名両方の意味で用いている。

(2) 空眼簿…程端礼が作った学問のカリキュラム表。師が日ごとの学習内容を配分し、生徒はそれを日々こなしていく。『分年日程』巻二の巻末(底本三十丁〜三十三丁)に雛形が附刻されている。

(3) 次巻工程…『分年日程』巻二のカリキュラムのこと。ここでは巻一の小學課程を終えることを意味する。

(4) 起止…始めと終わり。ここでは生徒がその日に読む書の始めと終わりのこと。

(5) 朱子所謂精思所謂虚心涵泳…輔広のまとめた『朱子読書法』六条に、「熟読精思、虚心涵泳」の二条がある。朱子読書法は既出。四三頁・注(2)参照。

(6) 孔子所謂温故知新…『論語』為政11章。

〔通釈〕

日程「小學課程…経書を読むのが三日、字を習い文章を作るのが一日。細目の分け方については、詳しくは「刊印日程空眼簿」を参照せよ。大學課程…次巻のカリキュラムに入ってから、はじめて(本格的に)

文を学ぶことを許可する。」

一、毎朝早朝に起きたら、そのまま先ずは最初の書の、昨日までに読み終わったところまでを一通り暗誦する。素読と暗誦を一日おきに行う。よくわからないところや間違えたところには印を付けておいて、夜になってから回数を補ってやり直す。一日おきに素読させるのは、そもそも文の意味を理解できず、間違えていても気付かないという幼年者のために設けるのであって、十四、五歳以上の者には暗誦だけをさせる。

師は起・止を「日程空眼簿」に記す。

そもそも最初の書に熟達し、一句もあやふやな処や誤っている処が無くなって、はじめて修養が達したといえるのであり、またそうであつてこそはじめて後日の夜間に、その時常に読んでいる書とかわるがわる暗誦復習したとしても身につくのである。もしまだ精通熟達していないのに、(一日のうちに)複数の書を読むようになってしまつては、復習暗誦は次第に疎かとなり、身につくことはない。十分心得おくべきことである。

暗誦して書に習熟するには、一字一句を読むにも、ことさらゆつくりと読み、深く思考し、理が心にゆきわたるようにしなければならぬ。朱子のいわゆる「精思」「虚心涵泳」と、孔子のいわゆる「温故知新」が、暗記暗誦だけの学と異なるのは、この点においてである。

一、師試倍讀昨日書。

一、師授本日正書。假令授讀大學正文章句或問、共約六七百字、或一千字。須多授一二十行、以備次日或有故。及生徒衆、不得即授書、可先自讀、免致妨功。先計字數畫定大段、師記號起止于簿。預令其套端禮所參館閣校勘法、黃勉齋、何北山、王魯齋、張導江及諸先生所點抹四書例、及放王魯齋正始音等書點定本、點定句讀、圈發假借字音。令面讀子細正過。於內分作細段、隨文義可斷處、多不過十句、少約五六句、大段約千字分作十段、或十一二段、用朱點記于簿。「四書本、惟有梅溪書院新刊集疏、字大小誤、有疏文可參攷集注、最便初學讀誦。每行二十字、五十行則千字。細段約四五行、則得矣。」還案。每細段讀二百遍。內一百遍看讀、內一百遍倍讀。句句字字要分明、不可太快。讀須聲實如講說然。句盡字重道、則句完。不可添虛聲、致句讀不明、且難足遍數、他日信口難舉。須用數珠記數、或板子記數。每細段二百遍足、即以墨銷朱點、即換讀如前。盡一日之力須足六七百字、日永年長、可近一千字。寧贖段數、不可省遍數。仍通大段倍讀二三十遍。或止通倍讀全章正經并注或問所盡亦可。必待一書畢、然後方換一書、並不得兼讀他書、及省遍數。此以朱子讀書法、小學書及所訂程董學則修。

〔校異〕

a 放：叢書集成本、「攷」に作る。四庫全書本、「故」に作る。 b 記數或板子：底本・四庫全書本、「或記數板子」に作る。叢書集成本に従い改める。

〔注釈〕

(1) 大學正文章句或問：『大學』本文、朱熹『大學章句』、朱熹『大學或問』のこと。『大學』本文は、

朱熹が校訂した『大学』経一章・伝十章をいう。『大学章句』は朱熹の『大学』に対する注釈書であり、『大学或問』は『大学』に関する諸家の説の紛糾を問答体を用いて説き明かした書である。

(2) 館閣校勘法：館閣は宋代の国家蔵書機構の別称。いわゆる三館（昭文館、史館、集賢院）と秘閣を指し、古今の経籍圖書の搜索、典藏、校勘、編目等のことを掌った。館閣校勘は官名でもあり、その句読法に関しては、『分年日程』巻二（底本二十丁）に「館閣校勘法、句読二字、側点為句、中点為読。凡人名地物名并長句内小句並從中点」と見える。

(3) 黄勉齋の四書例：黄榦（一一五二—一二二二）、字は直卿、号は勉齋。福建閩県の人。朱熹の娘婿で、朱子に学ぶ。著に『勉齋集』がある。黄榦が四書に点抹した例としては、『分年日程』巻二（底本二十丁）に「勉齋批点四書例」を収める。

何北山は、何基（一一八八—一二六八）、字は子恭、号は北山、諡は文定。浙江金華の人。黄榦に従学し、朱子の学を伝える。門下には王柏・金履祥等がいる。『大学発揮』『中庸発揮』『大伝発揮』『易啓蒙発揮』『太極発揮』『通書発揮』『西銘発揮』等を編す。また『北山集』がある。

王魯齋は、王柏（一一九七—一二七四）、字は会之、号は長嘯、更に魯齋と号した。浙江金華の人。何基に従学。著に『読易記』『書疑』『詩疑』『魯齋集』『研幾図』『可言集』等がある。諡は文憲。

張導江は、張鑿（一一三六—一三〇二）、字は達善、四川導江の人。世に導江先生と称される。王魯齋の門人。

何北山・王魯齋・張導江の具体的な点抹四書例は未詳。ただし、『分年日程』巻二（底本二十三丁）

に「続補句読例」を収め、小注には「並以朱子門人以下諸儒所点修之」とある。おそらくこの「続補句読例」は、三氏の点抹例にも基づいて作成されたものであると推測される。

(4) 王魯齋正始音：王柏『正始之音』。文字の始音を求めた書。程端礼は頭注に「端礼有広王魯齋正始音一冊」と附し、『分年日程』卷三(底本一丁)には『正始之音』一書を収録する。

(5) 梅溪書院：詳細は不明であるが、おそらく浙江に在った書院。元代には多くの書院が書籍を刊刻するようになり、梅溪書院もそのような書院の一つであったと推測される。梅溪書院刊刻本として『四書纂疏』は確認できないものの、大徳二年(一三〇七)に『千金翼方』、泰定元年(一三二四)に『類編標注文公先生經濟大衡』、元統二年(一三三四)『韻府群玉』等の刊刻本は現在にも伝わる。

(6) 纂疏：<sup>巢</sup>趙順孫『四書纂疏』二十六巻のこと。趙順孫、字は和仲、浙江縉雲の人。淳祐一〇年(一二五〇)の進士。『四書集注』の理解を助けるべく、朱子の門人弟子の説をまとめて『四書纂疏』を著す。伝は『宋元学案』卷七〇。

(7) 程董学則：程端蒙・董銖が共に作成した学則。『分年日程』綱領に「程董二先生学則」として収める。本誌第一三号一二八頁参照。

〔通釈〕

一、師は昨日授けた書の暗誦を試す。

一、師は本日の正書を授ける。かりに、『大学』を学ばせるならば、(一日に)本文・章句・或問、合計約六、七千字、あるいは一千字とする。一、二十行(即ち二〜四百字程度)ほどをやや多めに授けてお

いて、翌日の修養やあるいは何か用事が発生した時のために備えておくのも良い。生徒の人数が多くて教授し難い場合は、まず師みずからが（生徒達の前で）書を音読しておいて、修養が妨げられるのを避けるようにしておく。師は先に字数を計り、大段を定め記しておいて、「空眼簿」に起・止を記す。

あらかじめ端礼わたしが参検した館閣校勘の句読法、および黄勉齋・何北山・王魯齋・張導江と諸先生の点・抹をつけた四書例、それと『広王魯齋正始音』等の点定本に倣って、句読を打たせ、仮借字音に圈点を付けさせる。師は生徒に自分の前で音読させ、読み誤った箇所を子細に正していく。

大段の中に小段を分け作るには、文の意味に随って切るべき処で切り、多くても十句程度、少なくとも五、六句くらいとする。大段は約千字、分割して十段、あるいは十一、二段とし、朱筆を用いて「空眼簿」に（小段の数だけ）点を記す。「四書のテキストには、梅溪書院で新たに刊行された『四書纂疏』が良い。文字は大きく誤りは少なく、疏文もあつて集注を参考にでき、初学者が読誦するのに最も便利である。毎行二十字なので、五十行で千字。小段ならば約四、五行で良いであろう。」

机に戻らせ、小段ごとに二百遍ほど読誦させる。そのうち百遍は素読、百遍は暗誦である。一字一字一句一句はつきりと（音読）させ、むやみに早口なのはよくない。読む声はしっかりとした講説のようなく口調で行なう。一句は、その文字を究尽しその意味を重視すれば、その句は全うされる。あやふやな発音をしたり、句読が不明瞭であつたり、また読誦回数が不足したりしてはならない。後日、思いのままに採り上げるのが難しくなるからである。数珠を用いて読誦回数を数えるか、あるいは札たで回数を数えるのが良い。小段の読誦二百遍を満したならば、墨で（「空眼簿」の）朱点を一つ消し、次の小段

に移つて前と同じように読誦していく。

精力を尽くして、一日に六、七百字をこなすようにし、日々年々伸ばしていつて、一千字に近づけていけば良い。むしろ段数を増やしたとしても、読誦回数を省略してはならない。

それから大段を通して二、三十遍ほど暗誦させる。あるいは全章の経文、注、或問の究明するところを最初から通して暗誦させるだけでも良い。

必ず一冊の書物が終わつてから、そこではじめて次の一書に換えるのであり、決して同時に複数の書籍を併読したり読誦回数を省いたりしてはならない。これが『朱子読書法』・『小学』および校訂した「程董學則」によつて定めた学習方法である。

一、師試説昨日已説書。

一、師授説平日已讀書。不必多。先説小學書、畢次大學、畢次論語。假如説小學書、先令每句説通<sup>a</sup>朱子本注、及熊氏解<sup>(1)</sup>、及熊氏標題已通<sup>(2)</sup>、方令依傍所解字訓句意説正文。字求其訓、注中無者、使檢韻會求之、不可杜撰以誤人、寧以俗説麤解却不妨。既通説每句大義、又通説每段大義、即令自反覆説通<sup>(3)</sup>、面試通<sup>d</sup>乃已。久之、纔覺文義粗通、能自説、即使自看注、沉潛玩索、使來試説更詰難之、以使之明透。如説大學論語、亦先令説注透、然後依傍注意説正文。

〔校異〕

a 説通…叢書集成本、「通説」に作る。 b 檢…叢書集成本・四庫全書本、「簡」に作る。 c 説通…四庫全書本、此の二字無し。 d 面試…四庫全書本、「試」字の下に「覆説果」の三字有り。

〔注釈〕

(1) 熊氏解…<sup>宋</sup>熊節『性理群書句解』のこと。熊節、字は端操、福建建陽の人。慶元五年(一一九九)の進士。朱子の門人。周敦頤・程顥・程頤・張載・邵雍・司馬光・朱熹の七人を主として、その他の学者の文も広く集め、『性理群書句解』を編纂した。

(2) 熊氏標題…<sup>宋</sup>熊剛大注『性理群書句解』二十三巻のこと。熊剛大、福建建陽の人。嘉定七年(一二二四)の進士。蔡淵(蔡元定の子)及び黄榦に従学。熊節『性理群書句解』に、童子の学習の便をはかつて注を附す。その注釈書の別名は、『性理小学集解』。

(3) 韻会…<sup>元</sup>熊忠『古今韻会举要』三十巻。黄公紹『古今韻会』(佚書)に基づく。黄公紹、字は直翁、福建昭武の人。咸淳元年(一二六五)の進士。南宋末に、『広韻』『集韻』『礼部韵略』『韵補』『切韵指掌图』等宋金以来の韵書を参考にして、『古今韻会』を編撰。韻ごとに独用・通用を注し、字ごとに反切・発音を示し、その変遷を明らかにした。その後黄公紹の門客であった熊忠が再編。熊忠、字は子中、黄公紹と同じく福建昭武の人で、『古今韻会』の繁雑さと不便さから、簡略化して注を附し『古今韻会举要』三十巻とした。成書は元の大徳元年(一二九七)。「韻会」と簡稱される。

〔通釈〕

一、師は昨日既に説いた書を説くことを試す。



一、師は今までに読了した書を説くことを教える。必ずしも多くを説かせる必要はない。まず『小学』を説かせ、『小学』が終われば次に『大学』、『大学』が終われば次に『論語』を説かせていく。もし仮に『小学』を説かせるならば、まず句毎に朱子の本注および熊節編・熊剛大注『性理群書句解』を互いに通じるように説かせる。それらの意味が通じてからはじめて理解している文字・訓詁の意に従って本文を説かせる。文字の訓を調べようとしても、注の中に出てこない場合は『韻会』を調べて字訓を求めさせる。この字訓を疎かにさせて生徒を誤らせてはいけない。それよりはむしろ俗説の字音によっておいた方が、却って妨げとはならない。一句ごとの大義を通して説くことができるようになった上に、一段ごとの大義をも通して説くことができるようになったならば、そのまま生徒自身に繰り返し通して説かせる。面前で通じていることを試したならば、そこで終了する。

しばらくして生徒が文義の理解は大雑把なのに、うまく説くことができているようならば、生徒自身に注を読ませて、じっくりと意味を玩味させ、それから師のところへ来させて面前で説かせてみて、意味のあやふやなところは詰問し、生徒の理解を明白透徹にさせる。

『大学』『論語』を説かせる場合についても、先ず注を明解に説くことができるようにさせ、それから注の意によって本文を説かせるようにする。

一、小學。習寫字。必於四日內、以一日、令影寫智永千文楷字。如童稚初寫者、先以子昂所展千文大字爲

格、影寫一遍過、却用智永如錢眞字影寫。每字本一紙、影寫十紙。止令影寫、不得惜紙、於空處令自寫以致走樣。寧令翻紙以空處再影寫。如此影寫千文足後、歇讀書一二月、以全日之力、通影寫一千五百字、添至二千三四千字。以全日之力如此寫一二月乃止。必如此寫、方能他日寫多、運筆如飛、永不走樣。又使自看寫一遍。其所以用千文、用智永楷字、皆有深意、此不暇論、待他年有餘力、自爲充廣可也。蓋儒者別項工夫多、故習字止如此。用筆之法。雙鉤懸腕、讓左側右、虛掌實指、意前筆後。此口訣也。欲考字、看說文、字林、六書略、切韻指掌圖、正始音、韻會等書、以求音義偏旁點畫六書之正。每考三五字或十數字、擇切用之字先考。凡鈔書之字、偏旁須依說文翻楷之體、骨肉間架氣象用智永。非寫詩帖、不得全用智永也。

〔校異〕異同無し。

〔注釈〕

- (1) 影写：おそらく手本を下に敷いて、上からなぞる書の練習方法。後文に見える「看写」は手本を横に置き、その字を見ながら練習する方法。本訳注では「影写」を「透写」、「看写」を「臨摹」と訳す。
- (2) 智永千文：智永の書いた『千字文』のこと。四五頁注(8)参照。智永は、陳隋時代(五五七—六一八)の僧。浙江会稽の人で、王羲之七世の孫。俗名は王法極、号は永禪師。書に巧みで、祖法を継承し、『真草千字文』八百余本を書いて浙東の諸寺に頒布したと伝えられる。

- (3) 子昂：趙孟頫(一二五四—一三二二)、子昂は字。号は松雪道人、鷗波等。もと宋の宗室であるが、元朝に仕えた。古人の法によって研鑽し、篆隸草行楷の各書体に秀でる。趙孟頫は「公蚤年喜びて

智永千文を臨す」(『甫田集』卷二に引く柳貫の語)と言われるように智永の書をもよく学んだ。そのため、ここでいう『千字文』は「趙孟頫臨智永千文」等を指すと考え得る。

(4) 如錢：「錢のように」は大きな文字の形容。

(5) 双鉤懸腕：書法における運筆法の一つ。双鉤は親指に対して人差し指と中指の二本をかけて聿(筆管)を持って字を書くこと。懸腕は、腕を宙に懸けるように浮かして書く方法。

(6) 説文：許慎『説文解字』三十卷。現存最古の字書。許慎(三〇?—一二四?)は六書説(象形・指事・会意・形声・転注・仮借)に基づいて漢字の形・音・字義をまとめ、約九千字強を収録した。

(7) 字林：呂忱『字林』七卷。呂忱(四二〇—四七九)が『説文解字』の不備を補って、文字の訓詁を記した書。当時は『説文』と併せて重視されたが、唐以降は振るわなくなった。

(8) 六書略：宋鄭樵『通志』二十略中の一。六書に関する意見を叙す。『分年日程』卷三(底本十六丁)に部分的に収録する。

(9) 切韻指掌図：『切韻指掌図』二卷。音韻字書。司馬光が撰したと言われるが誤り。楊中修の作とも言われるが、南宋人が著わしたのであること以外は不明。「檢例」一卷は元邵光祖の補うところ。

(10) 正始音：王柏『正始之音』。五三頁注(4)参照。

(11) 韻会：元熊忠『古今韻会舉要』三十卷。五六頁注(3)参照。

(12) 間架：文章の結構のすばらしいものを、家屋の結構になぞらえた語。

〔通釈〕

## 一、小学

文字を書くことを習う。必ず四日に一日は智永『千字文』の楷書を透写させる。

童子が最初に文字を書く場合は、まず趙子昂の書した『千字文』の大字を手本として、一通り透写させ、それから智永の銭のように大きな文字を正しく透写させる。一字づつ一紙に書かせ、十紙に透写させる。ひたすら透写だけをさせる。紙を惜しんで、空いている箇所生徒自身に好き勝手に書かせて変な癖をつけさせてはならない。むしろ紙を裏返して再度透写させた方がよい。このように『千字文』を透写させること充分になったならば、一、二ヶ月ほど経書を読むことを中断して、一日の全精力を書法の学習に費やす。一日中書くこと千五百字に及ぶようにし、それから徐々に増やして行って二千、三千、四千字に伸ばしてゆく。連日このように書かせることを一、二ヶ月ほど続ける。必ずこのように書いて行ってこそ、後日になって多く書くことができるようになり、筆の運びは飛ぶように滑らかになり、長時間にわたって書いていても字は崩れないようになるのである。

それからさらに生徒自身に一通り臨摹させる。『千字文』や智永の楷書を用いるには深い意図があるが、いまここで論ずる暇はないので省略する。

後年になって余力がある時に、生徒自身で書法の学習を展開していくようにすれば、それでよい。やはり儒者は他にも多くの修養があるので、文字を習うことはこのくらいに留めておく。

運筆法は、親指、人差し指、中指で筆を持ち、肘を肩まで挙げて宙に懸けるようにし、左肘を外にひき右肘を中に運び、手のひらの力は抜いて指先はしっかりと握り、己の意を定めてから筆をとるように

する。これが（運筆法の）口伝の秘訣である。

字を考究する場合は、『説文解字』『字林』『六書略』『切韻指掌圖』『正始音』『韻会』などの書を見て、音義・偏傍・点画・六書の正しいものを求める。三字か五字あるいは十数字の考究ごとには、重要な字を選びその字から先に考えるようにする。

およそ書写する文字というものは、偏傍は『説文解字』の翻楷の体（篆書体から楷書体にした字）に従い、字の骨組み肉付け・結構の秀困気は智永の文字に倣うようにする。詩帖を書くのでなければ、智永の字を全て模倣することはない。

一、小學。不得令日日作詩作對、虛費日力。今世俗之教、十五歲前不能讀記九經正文、皆是此弊。但令習字演文之日、將已說小學書作口義、以學演文。每句先逐字訓之、然後通解一句之意、又通結一章之意、相接續作去。明理演文、一舉兩得。更令記對類單字。使知虛實死活字、更記類首長天永日字。但臨放學時、面屬一對便行。使略知對偶輕重虛實足矣。此正爲己爲人、務內務外、君子儒小人儒之所由分。此心先入者爲主、終此生不可奪。不惟妨工、最是奪志。朱子諄諄言之。切戒。

〔校異〕

a 小學…底本、「大學」に作る。卷二後附の「刊印日程空眼簿式」小学日程（底本卷二・三十三丁表）及び叢書集成本に従って改める。 b 生…四庫全書本、「身」に作る。

〔注釈〕

(1) 口義…もとは唐代明経科の口頭試験の一つ。ここでは師の面前にて、書篇の内容を口述させること。

(2) 類首長天永日字…未詳。

(3) 為己為人：『論語』憲問25章「子曰、古之學者為己、今之學者為人。」

(4) 務内務外：經書・程朱等の言に典故を検し得ないが、「務内」「務外」は君子の学とその他の学の違  
いとして言われる。例えば、宋徐元杰『榘塾集』卷一〇・送歐陽奇父序に「天下無真學者久矣。所謂  
真學者、務内而不務外、尽己而不求人」とある。また顔子と子張の違いとしても言われ、『論語集註  
大全』卷一九〇・子游曰吾友張也章・注に「行仁惟務内。……子張務外好高、此其所以未仁也」とあ  
り、元袁俊翁『四書疑節』卷一に「顔淵之為人、学力樸実、務内而不務外、……子張之為人、天資高  
邁、務外而不務内」とある。

(5) 君子儒小人儒：『論語』庸也13章「子謂子夏曰、女為君子儒、無為小人儒。」

(6) 此心先入者為主終此生不可奪…出典未檢。

(7) 不惟妨工最是奪志：『朱子語類』卷一三153条「問科舉之業妨功。曰、程先生有言、不恐妨功、惟恐奪志。  
若一月之間著十日事舉業、亦有二十日修学。若被他移了志、則更無医処矣。」

〔通釈〕

一、小学

毎日、詩や対偶文辞（四六文）を作らせて、一日の労力を虚しく費やさせてはならない。近年におけ

る世俗の教えが、十五歳以前には『九經』本文を閲読させないというのは、全くの弊害である。

字を習い・文章を作らせる日には、既に説いたことのある『小学』の意味内容を口述させて、文章の作り方を学ばせるのである。一句ごとに、その句の一字一字をまず訓ませ、それからその一句の意味を通して解釈させる。さらに一章の意全般を通して意味が通じるようにさせ、それぞれつなぎあわせて集約させるのである。そうすれば、理を明らかにすることと文章を作ることと、一挙兩得をなすであろう。

それから文字については、対字・類字・单字を覚えさせる。文字の虚・実・死・活を分からせ、さらに類首長天永日（未詳）の字を覚えさせる。家塾が休みの時には、師の面前にて一つの対遇文辞を作らせるだけで良い。対偶・輕重・虚実をだいたい分からせれば、充分である。

これらが、ちようど「己のためにすること、人のためにすること」「内に務めることと、外に務めること」「君子たる儒者と小人たる儒者」とが分かれるところであり、「この心が先に入って主となれば、一生を終えるまでその主を奪うことは出来ない」「それはただ工夫を妨げるだけでなく、弊害の最たるものは志を奪ってしまう」と言うものである。それゆえ、朱子は懇切丁寧<sup>ニ</sup>にこのことを説いたのである。切に戒めなくてはならない。

一、隻日之夜。大學、令玩索<sup>レ</sup>已讀大學。字求其訓、句求其義、章求其旨。每一節、十數次涵泳思索以求其通、又須虚心以爲之本。每正文一節、先攷索章句明透、然後據章句之旨、以說上正文。每句要說得精確

成文、鈔記旨要。又攷索或問明透、以參章句。如遇說性理深奧精微處、不計數看、直要曉得記得、爛熟乃止。仍參看黃勉齋眞西山集義通釋講義<sup>(1)</sup>、饒雙峯纂述輯講語錄<sup>(2)</sup>、金仁山大學疏義語孟攷證<sup>(3)</sup>、何北山王魯齋張達善句讀批抹畫畫<sup>(4)</sup>、表注音攷<sup>(5)</sup>、胡雲峯四書通通證<sup>(6)</sup>、趙氏纂疏、集成發明等書、諸說有異處、標點以待思問。如引用經史先儒語、及性理制度治道故事相關處、必須檢尋看過。凡玩索一字一句一章、分看合看。要析之極其精、合之無不貫。去了本子、信口分說得出、合說得出、於身心體認得出、方爲爛熟。朱子諄諄之訓先要熟讀、須是正看背看、左看右看、看得是了、未可便道是、更須反覆玩味<sup>(8)</sup>、此之謂也。不必多、論語止看得一章二章三章足矣。只要自得。凡先說者、要極其精通。其後未說者、一節易一節、工夫不難矣。只要記得。大學畢、次論語、次孟子、次中庸。小學、止令玩索小學。燈火、起中秋止端午。或生徒多、參攷之書難遍及、則參差雙隻夜以使之。

〔校異〕

a 大學：四庫全書本、此の二字無し。 b 索：四庫全書本、「索」字の下に「大學」の二字有り。 c 通：

四庫全書本、「通」の一字無し。 d 於：叢書集成本、「終」に作る。 e 燈：叢書集成本、「燈」に作る。

〔注釈〕

(1) 黃勉齋眞西山集義通釈講義：黃翰『論語通釈』十卷・『六經講義』一卷および眞德秀『四書集編』のこと。黃翰は既出、五二頁・注(3)参照。

『四書集編』は、大學・中庸を眞德秀が直接編纂し、論語・孟子を劉承が眞德秀の遺説を集めて成書した。眞德秀(一一七八—一二三五)、西山は号。福建浦城の人。著に『大学衍義』等がある。伝



は『宋史』卷四三七、『宋元学案』卷八一。

- (2) 饒双峯纂述輯講語錄：南宋饒魯『庸学纂述』『双峰語録』。輯講は未詳。『千頃堂書目』卷一一に見える。「饒魯双峰講義五冊」のことを指すか。饒魯、字は伯輿、江西饒州の人。双峯は号。黄榦に従学した。
- (3) 金仁山大学疏義語孟攷証：元金履祥『大学章句疏義』一卷、『論語孟子集註考証』十七卷のこと。金履祥（一二三二—一三〇三）、字は吉父、浙江蘭溪の人。仁山は号。王柏・何基に従学した。
- (4) 何北山王魯齋張達善句詠批抹画截：何基（号は北山）・王柏（号は魯齋）・張逵（字は達善）は既出。五二頁・注（3）参照。本文に列挙された前後の書目から、何基・王柏・張逵の四書に関する句詠例を指すものと考えられるが、詳細は不明。
- (5) 表注音攷：『分年日程』の引用書目（底本卷一・十四丁裏、同二十丁裏等）から類推すれば、おそらく元金履祥『尚書表注』十二卷と元牟応龍『五經音攷』のこと。
- (6) 胡炳文（一二五〇—一三三三）、字は仲虎、浙江婺源の人。朱子の学に専心し、雲峰先生と称された。著には『周易本義通釈』『書集解』『春秋書解』『礼書纂述』『大学指掌図』『五經会義』『爾雅韵語』等の書がある。

張存中、字は徳庸、新安の人。胡炳文『四書通』が義理に詳しいのに名物が疎かであったため、それを補うべくして『四書通証』を著した。
- (7) 趙氏纂疏集成發明：南宋趙順孫『四書纂疏』二十六卷、吳真子『四書集成』、元陳櫟『四書發明』三十八

卷のこと。趙順孫は既出、五三頁・注(6)参照。吳真子は、克齋先生と号したこと以外は未詳。

陳櫟(一二五二—一三三四)、字は寿翁、浙江休寧の人。延祐四年(一三一七)、『四書發明』を編纂。

(8) 朱子諄諄之訓、更須反覆玩味：『朱子語類』卷一〇34条「讀書之法、先要熟誦。須是正看背看左看右看。看得是了、未可便說道是、更須反復玩味。」

〔通釈〕

一、奇数日の夜。

大学課程 既読の『大学』をよくよく考えさせる。字についてはその訓を、句についてはその意味を、章についてはその大旨をそれぞれ求めさせる。一節ごとに、十数回は熟読思索させて意味が通じるようにさせ、また虚心に玩味してこれを大本とさせるのが良い。

本文一節ごとに、まず最初に『章句』をはつきりと考索してから、その後で『章句』の大旨を拾わせて該当する本文を説かせる。一句ごとに、説くことは精密確実として文章の体をなし、要旨を書き出せるようにさせる。また『或問』の考索がはつきりしてから、『章句』を参観させる。

もし性理を説くことが深奥精微である箇所及んだならば、回数を数えずにその箇所を誦し、ひたすら理解熟達するまで続ける。

黄幹『論語通釈』『六経講義』、真徳秀『四書集編』、饒魯『学庸纂述』『輯講』『双峯語録』、金履祥『大学章句疏義』『論語集註考証』『孟子集註考証』、何基・王柏・張<sup>し</sup>逵が用いた句読・批抹・画截例、

金履祥『尚書表注』、牟昶龍『五經音攷』、胡炳文『四書通』、張存中『四書通証』、趙順孫『四書纂疏』、吳真子『四書集成』、陳櫟『四書發明』等の書を參觀して、これら諸説の異なるところについて、印を付けておき、思量が熟成するのを待つ。

引用してある經書・史書・先儒の語録および性理・制度・治道・故事などそれぞれ関係することについては、必ず詳しく調べて読むようにさせる。

一字・一句・一章をよくよく考えて、分けて読んだり合わせて読んだりする。分断して考える際は精密を極め、合わせて考える際は通じないことがないようにする。一書を一通り読了し、分断しても合しても思いのままに説くことができ、身心両面において体認することができて、はじめて熟達したことになる。朱子の懇切丁寧な教えに、「まず熟読することを求め、あらゆる角度から読み込まねばならず、その書を読み終わっても説くことができなければ、さらに反復・玩味しなくてはならない」とあるのは、このことを言ったのである。

一日につき多くを扱う必要はない。『論語』はただ一章か二章、多くても三章を読誦すれば十分である。ただ自得させるようにする。

およそまず説いたものについては精密貫通を極めることを求めていく。そうすればその後にはまだ説いていないところに関しても、一節一節ごとに理解しやすくなっていき、工夫は難しいものではなくなる。そのため、それらを覚えておくようにさせる。

『大学』が終われば、次いで『論語』、次いで『孟子』、次いで『中庸』。

小学課程　ただ『小学』を熟読玩味させる。

灯りは中秋から端午まで用いる。

あるいは生徒が多くて、参考する書が全員に行き渡らないのであれば、奇数日の夜・偶数日の夜でそれぞれ交互に便を図る。

一、雙日之夜。倍讀凡平日已讀書一遍。倍讀一二卷或三四卷、隨力所至、記號起止、以待後夜續讀。倍讀熟書、必緩而又緩、思而又思、詳見讀冊首書條<sup>1)</sup>。凡溫書必要倍讀、纔放看讀永無可再倍之日、前功廢矣。切戒。如防誤處、寧以書安于案、疑處正之、再倍讀。倍讀熟書時、必須先倍讀本章正文、畢、以目視本章正文、倍讀盡本章注文、就思玩涵泳本章理趣。「凡倍讀訓詁時、視此字正文。凡倍讀通解時、視此節正文。」此法不惟得所以釋此章之深意、且免經文注文混記無別之患。如倍讀忘處、急用遍數補之。凡已讀書、一一整放在案、周而復始。以日程并書目、揭之于壁。夏夜浴後露坐、無燈、自可倍讀。

〔校異〕

a 燈：叢書集成本、「燈」に作る。

〔注釈〕

(1) 読冊首書条：程端礼が既述した読書法のこと。「凡冊首書爛熟、無一句生誤、方是工夫已到、方可他日退在夜間与平日已読書輪流倍温、乃得力。如未精熟、遽然退混諸書中、則温倍漸疎、不得力矣」と

ある。四八頁参照。

〔通釈〕

一、偶数日の夜

平日に読んだ書を一通り暗誦させる。暗誦は一、二巻あるいは三、四巻であつて、読み進めたところに随つて起・止を記しておき、後日の夜はそこから随つて読む。

書籍を暗誦・熟読するには、ゆつくりと丁寧に、充分によく思慮するようにする。詳しくは「読冊首書」の条に示した。復習には、必ず暗誦させるようにする。ただ素読するだけで、長いあいだ暗誦しない日が續くと、それまでの修養が衰えてしまう。切に戒めるべきである。

誤読の防止については、書籍を机の上に置いて（じつくりと取り組み）、疑わしい箇所は正していつてから、暗誦を再開するのが良い。暗誦熟読する時は、必ず本章の本文を暗誦して、それが終わつてから眼は本文を視ながら該当する注釈を暗誦し、その章の理趣をよくよく思索玩味する。「およそ暗誦して字句を解釈する時は、その字の本文を視るようにし、暗誦して全体の意味を解釈する時は、その節の本文を視るようにする。」この方法は、ただその章の深意を解釈するためだけでなく、経文と注釈を混同して記憶し分別がなくなつてしまふという憂いから免れるためでもある。

もし暗誦して忘れたところがあれば、優先してその節の暗誦回数を補足し、それをこなす。読み終わった書籍は、一冊一冊きちんと机にしまつておき、一通り読み終わると、また最初の書籍から始める。「日程」および「書目」は壁に掲げておく。

夏の夜は、湯浴み後などに屋外に座って、灯りはつけずに暗誦する。

一、隨雙隻日之夜、附讀看玩索性理書。「性理畢、次治道、次制度。」如大學、失時失序、當補小學書者。先讀小學書數段、仍詳看解、字字句句、自要說得通透乃止。小學書畢、讀程氏增廣字訓綱〔此書鈐<sup>(2)</sup>定性理、語約而義備、如醫家脈訣、最便初學〕。次看北溪字義、續字義、次讀太極圖、通書、西銘、並有朱子解、及有何北山發揮<sup>(5)</sup>。次讀近思錄〔看葉氏解〕、續近思錄〔蔡氏編、見性理羣書〕。次看讀書記、大學衍義、程子遺書、外書、經說、文集、周子文集、張子正蒙、朱子大全集、語類等書。或看或讀、必詳玩潛思、以求透徹融會、切己體察以求自得。性理緊切書目通載于此、讀者自循輕重先後之序。有合記者仍分類節鈔。若治道、亦見西山讀書記、大學衍義。

〔校異〕

a 性理畢次治道次制度：叢書集成本、割注ではなく、本文扱いとす。 b 鈐：叢書集成本、四庫全書本、「銓」に作る。 c 太極圖：叢書集成本、「太極圖說<sup>△</sup>」に作る。 d 有：叢書集成本・四庫全書本、「看」に作る。 e 有：叢書集成本、此の一字無し。

〔注釈〕

(1) 小学書：朱熹『小学』六卷。四七頁・注(1)参照。朱熹は『大学或問』『朱子語類』等において、時序を失した者でも、大学・小学を共に学ぶことよって聖賢の学に着手することが出来ると説いて

いる。

(2) 程氏増広字訓綱…程端蒙撰、程若庸補輯『性理字訓』一卷。四四頁・注(4)(5)参照。

(3) 脈訣…<sup>巢</sup>崔嘉彦『脈訣』一卷。崔嘉彦が、西晋の王熙(字は叔和)に仮託して著し、四言の歌訣を用

いて脈学を論じた書。成書は一一八九年。以来、世に盛行した。<sup>巢</sup>趙希弁続輯『郡齋讀書後志』卷二・子類・医家類に、「脈訣一卷。右題曰、王叔和皆歌訣。鄙淺之言、後人依託者。然最行于世」とある。崔嘉彦は、宋の道士で、紫虛真人と号す。故に『脈訣』の別名は、『崔真人脈訣』『崔氏脈訣』。

(4) 北溪字義続字義…<sup>宋</sup>陳淳『北溪字義』二巻と、続字義はおそらく『北溪字義詳解』二巻のこと。『千頃堂書目』巻一一には、『陳淳北溪先生性理字義』の次条に、「又北溪先生字義詳解二巻 即前字義引古今事實証之」と記す。

(5) 太極図く何北山發揮…『太極図』一卷・『通書』一卷は周敦頤の著。『西銘』一卷は張載の著。朱熹は上記三書に注解を付して『太極図説解』『通書注』『西銘解』を著した。何基(号は北山)は、『太極發揮』『通書發揮』『西銘發揮』を著している。何基について、五二頁注(3)参照。

(6) 近思録、続近思録…『近思録』十四巻は呂祖謙(一一三七一—一一八二)と朱熹(一一三〇—一一〇〇)の共編。淳熙二年(一一七五)、朱呂二氏は、周敦頤・二程・張載等の言をとりあげて、六二〇条にまとめた。その後、淳祐二年(一二五二)、葉采が『近思録集解』を作る。葉采、字は仲圭、福建邵武の人。淳祐元年(一二四二)の進士。蔡淵・陳淳に従学した。伝は『宋元学案』巻六五。

『続近思録』は、<sup>巢</sup>蔡模の撰で、続録十四巻・別録十四巻がある。蔡模、字は仲覺、号は覺軒。福

建建陽の人で、蔡沈の子。著に『易伝集解』『大学衍説』『論孟集疏』等がある。

『性理群書』後集には、これら『近思録』『近思統録』『近思別録』が収録されている。

(7) 読書記語類…『読書記』六十一卷・『大学衍義』四十三卷は真徳秀の著。『程子遺書』『程子外書』『経説』『文集』は二程子の学説を編集した書で、『二程全書』に収められる。『周子文集』は、周敦頤の文集、『周子全書』に収められる。『張子正蒙』は、張載の著した『正蒙』。『朱子大全集』『朱子語類』はそれぞれ朱熹の文集、語録を編集した書。

〔通釈〕

一、奇数日・偶数日の夜によって、性理書を熟読玩味することを付け足す。「性理が終われば、その次は治道、次いで制度。」

もし大学課程が、時期・順序を誤っていたならば(即ちある程度長じてから聖学に着手した場合)、『小学』で補う。まず『小学』数段を読んだから、詳細に読誦・解釈し、字々句々は、はっきりと解説できるようになるまで続ける。『小学』が終われば、程達源が増補改訂した『性理字訓』を読む。「この『性理字訓』は、性理を選定し、語句は簡約でありながら意義は備わっており、医家における『脈訣』のように、初学者に最も便利なものである。」

次いで陳淳『北溪字義』『北溪字義詳解』を読み、周敦頤『太極図』『通書』、張載『西銘』ならびに朱熹『太極図説解』『通書注』『西銘解』、および何基『太極發揮』『通書發揮』『西銘發揮』を読み、それから『近思録』『葉采』『近思録集解』を読む、「『続近思録』『蔡模の編、』性理群書』に収められる」



を読む。その次は真徳秀『西山読書記』『大学衍義』、『程子遺書』『程子外書』『經說』『文集』『周子文集』『張子正蒙』『朱子大全集』『朱子語類』等の書を読む。黙読したり素読したりして、必ず詳細に玩味して一心に思量し、徹底して理解しようとし、己に切実なものとして体察・自得するようにする。「性理」は特に重要であり、書目はここに一通り掲載しておいた。読書するには、軽重・先後の順序に従う。当然記録しておくべきことがあれば、分類して節ごとに書きとめておく。

治道については、真徳秀『西山読書記』『大学衍義』を見る。

一、以前日程、依序分日、定其節目、寫作空眼、刊定印板。使生徒每人各置一簿、以憑用工。次日早於師前試驗、親筆勾銷。師復親標所授起止于簿。庶日有常守、心力整暇、積日而月、積月而歲、師生兩盡、皆可自見。施之學校公教、尤便有司拘鈐考察。小學、讀經、習字演文、必須分日。讀經必用三日、習字演文止用一日。本未欲以此間讀書之日、緣小學習字習演口義小文詞、欲使其學開筆路、有不可後者故也。〔假如小學簿紙百張、以七十五張印讀書日程、以二十五張印習字演文日程、可用二百日。〕至如大學、惟印讀經日程。待四書本經傳注既畢作次卷工程時、方印分日讀看史日程。畢、印分日讀看文日程。畢、印分日作文日程。其先後次序、分日輕重、決不可紊。人若依法讀得十餘箇簿、則爲大儒也孰禦。他年亦須自填以自檢束、則歲月不虛擲矣。今將已刊定空眼式連于次卷。學者誠能刊印、置簿日填、功效自見也。

〔校異〕

a 拘：四庫全書本、「鈎」に作る。 b 未 叢書集成本、「未」に作る。

〔注釈〕

- (1) 読書日程：「読経日程」のこと。底本卷二・三十丁裏に収める。
- (2) 習字演文日程：「小学習字演文日程」。底本卷二・三十三丁表に収める。
- (3) 分日読看史日程：「分日読看史日程」。底本卷二・三十一丁表に収める。
- (4) 分日読看文日程：「分日読看文日程」。底本卷二・三十一丁裏に収める。
- (5) 分日作文日程：「読作卒業日程」のこと。底本卷二・三十二丁に収める。

〔通釈〕

一、これより以前の修養日程は、順序に従って日程を配分し、節目を定め、「空眼簿」に書き写して、版木を用いて刊刻する。生徒一人一人に一簿を置かせ、大いに修養に努めさせる。

翌日早朝に、師の面前で考察して、(過ちがあれば)師自ら筆をとって過ちを修正する。また師は生徒に授ける書の起・止を「空眼簿」に記す。望むらくは、生徒が日々常に守って、心身ともにゆつたりと落ち着いて、日を積み重ねて月に、月を積み重ねて年となっていくことであり、そうして師弟ともに力を尽くしていったならば、その効果はおのずと現れるだろう。この方法を学校や公的教育機関で実施したならば、官吏の監督や考査に最も便利であろう。

小学課程 読経と習字演文との日程配分を必ず行なう。読経には三日、習字演文にはただ一日だけをあてるようにする。もとより習字演文の日によって読書の日を中断したくはないのだが、小学で字を習う

ことや口義・小文詞の作文を習うことによつて、生徒の筆使いを上達させようと願うものであり、後回しにできないためである。「たとえばもし、小学課程の「空眼簿」が百丁だとすれば、七十五丁は「読経日程」を、二十五丁は「習字演文日程」を印刷し、二百日分として用いることができる。」

大学課程　ただ「読経日程」だけを印刷する。四書の経文・伝注が終わり、次巻のカリキュラムに着手する時になつてから、「分日読看史日程」を印刷する。それが終われば、「分日読看文日程」を印刷し、さらにそれが終わつてから「分日読作挙業日程」を印刷する。この順序や日程配分のバランスは、絶対に乱してはならない。

もしこの方法に従つて、十回以上「空眼簿」を終えたならば、その人物が大儒となるであろうこと、誰が妨げることできようか。後年になつても、この「空眼簿」を自ら埋めていつて自制するのが良い。そうしたならば、歳月を無駄に擲つことにはならないであろう。

今ここでは刊刻した「日程空眼簿式」を次巻に後附しておく。生徒はそれを印刷して傍らに置き、日々それをうめていったならば、その効果はおのずと現れるであろう。